
部活時々初恋

紫悠透樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

部活時々初恋

【Nコード】

N7397Y

【作者名】

紫悠透樹

【あらすじ】

母との何気ない会話で思い出す思い出。
忘れていたあの頃を思い出す。

それは何かが動き出すシグナルかもしれません。

初投稿です。

つたないお話ではありますが完結できるように頑張ります。

暖かい心で見まもってください。

中編ぐらいのお話になる予定です。

プロローグ

「そう言えばあなたの高校時代の先輩何て言ったかしら？ほら、あなたがよく面倒見てもらった」

「山脇先輩？」

「そうそう、その先輩結婚されたそうよ」

「そうなんだ。ってか、なんで母さんが知ってるの？」

「広報に載ってたの」

「ああ。先輩警察官だったね」

仕事から帰ってすぐ母親に言われ、先輩の顔を思い浮かべた。

山脇晴明

私の一学年先輩。

そして、初恋の人。

「山脇先輩か〜懐かしいなあ」

最後にあっただのは私が二十歳になった時。

あの時はたしか、警察学校に行ってるって言ってた。

「懐かしいなあ〜」

入部初日〜三日

「ね、部活どうする？」

高校入学から一週間。

同じ中学からこの賢光けんこう高校に来た友達は三人。

その内の一人は同じクラスになった向井薫が前の席にいた私、藤原あ淳華つがに話しかけてきた。

「ん？私は決まってるよ」

「また吹奏楽？」

「うん。そのためにここ受けたんだしさ。かおちゃんは入んないの？」

「うーん、吹奏楽はもういいや。テニス部入ろうと思ってる」

「そっか」

かおちゃん、こと薫は中学は私と同じ吹奏楽部でフルートをやっていた。

私は小学生の頃からずっと吹奏楽一筋で楽器も何となくチューバを続けている。

高校では、違う楽器をやってみたいと思っていた。

思っていたんだが……………

「君、藤原さん？チューバやってたんだって？」

「はあ、」
「じゃ、チューバよろしく!!!俺、トロンボーンやりたいからチューバは頼んだ」
チューバパートの三年で部長の高峯先輩の一言で、決定してしまいました。
後から同じ中学から来ていた先輩に聞いたのだがどうやら春休み中に顧問と話していたようでチューバに1年が入ったら移ってもいいと言われていたようだ。

「どうしよう…」
「なにが？」

一人鬱になっていたら高校からの友達、井本桂子が不思議そうに首を傾げていた。

「私の中学って吹奏楽は女子ばっかだったからさあ〜」
「そうなんだ？」

「男の先輩ってどうもさあ〜上手くやっっていける自信無い」
「大丈夫だつて〜」

真剣に悩んでいるのに井本は笑った。

「イモはいいよ!!!同じ1年も二人居るし、女の先輩も居るからさ
…私なんて男の先輩と二人だよ!!!」
イモはサククスなので人数が多い。

ソプラノ一人、アルト二人、テナー二人、バリトン一人の総勢六名。それに引き替え、私のチューバパートはまだ見ぬ男の先輩と私の二人。

何故まだ見ぬのかとゆうとどうやらその先輩は特進クラスで授業が二時間多いらしい。

クラブ紹介の時も模試があったらしく不参加だったらしいのでまだどんな人かは知らないのだった。

居ない間、私は同じバスパートと言うことでユーホニウムの先輩

が面倒を見てくれていた。

「大丈夫だつてゝあつちんならさゝ」

このあつちんと言うのもその先輩がつけたあだ名だった。

一週間経ちました。

さて、まだ見ぬ先輩と初顔合わせの日がやってまいりました。
この日は入部初の日曜日。

練習は朝9時から夕方5時までの1日練習です。

勿論、私たち1年は先輩方より早く8時集合。

「あっちゃん！待ちに待ったこの日が来たね」

「ああ…来てしまいましたよ」

テンション高めに言うのは勿論、イモこと井本桂子だ。

自分はさっさと首からサックスを提げ口にはリードを加えている。

「なになに？なんかあるの？」

興味深々で近づいてきたのはたまこと環 麻由が手にはフルートを携え首を傾げる。

「何々？なんかあるの？」

そこにみなこと梨本巳波が加わる。

「それがさあ」

そんな二人に嬉々として説明するイモ。

私は溜め息を付き譜面立てと椅子を三脚持ち音楽室を出る。

今日は主に基礎練習メイン。

勿論、パートによっては初心者も居るための配慮だそうだ。

基礎練後、今年の吹コン（吹奏楽コンクール）の課題曲の音取りを各パートで行う予定らしい。

余談だが基礎練はバスパートとしてユーホニウム、チューバ、コンバスで合同で行う。

しかし今年はコンバスはいないので、チューバ二人、ユーホニウム一人、の三人です。

曲練、個人練などは各パートでやるそうだ。

練習場所は、金管は大体屋上。

木管は空き教室か廊下に陣取る。

しかし、今日はあいにくの雨。

雨の日は金管が音楽室の一階下の廊下や空き教室。

木管はそこ以外。

まあ、所詮移動しやすいかそうでないかで近場から決まっていく。

勿論、我らバスパートは一番身動きが取りにくいため階段を降りたすぐの廊下だ。

「あっちゃんおはよー!!」

「神原先輩。おはようございます」

廊下にセツティングし終わり音楽室に戻ると何だかんだで面倒を見てくれた先輩が手を振った。

それに挨拶を返すとニコニコ笑った。

ほんと可愛い先輩だ。

ん？その先輩の前に見知らぬ男の先輩。

まさかその人が例の先輩でしょうか？

「山脇君。あのこが藤原淳華ちゃん。あっちゃん、お待ちかねの山脇君」

神原先輩が言うと私の背を向けていた先輩が振り向く。

振り向いたのはかっこいいモテそうな所要イケメンと言われると人物だった。

「藤原淳華です。宜しくお願ひします」

「山脇晴明です。宜しくな」

イケメンがニカッとやんちゃな笑顔で手を取り、上下に振る。

見た目に寄らず、いたずらっ子のような可愛い人だな、これならやっつけていけるかなと思った。

5月に入りました。

5月に入りました。

入学から約1ヶ月。

入部して約二週間。

まだ、続けてます。

と言うか、うちのバスパートが一番仲が良いかもです。

「淳華。今日の部活終わったら補習な」

「うっっ！！お願いします」

何故か例の先輩に気に入られた見たいです。

それもこれも、あの初顔合わせの日に起こった事が切っ掛けにだと私は分析します。

あの日、挨拶を終えた私たちバスパートは楽器と譜面を持ち指定の場所に向かい椅子に座る。

なぜか、私が真ん中に挟まれる形だ。

「中学でも吹奏楽？」

「はい。ずっとチューバです」

「なら俺らのパートは楽だな」

「そうね。あっちはがんばり屋だから課題曲も直ぐに吹けちゃうかもよ」

「じゃ、とりあえず、音だしするか」

先輩が譜面を台にセットし、楽器を構えるのに慌てて習おうとした

とき私の譜面から紙がヒラリと舞落ちた。

「ん？」

「あゝ！！！」

「あら」

その紙は表を向けたまま床に落ちた。

その紙の正体は数学の確認テスト。

入学から1ヶ月たつと毎年行われるとゆう、中学程度のテストだ。

そのテストで私の取った点数は……………

「15点……………」

「アハ…、アハハ…」

そんなこんなで家庭教師が着きました。

週三日。

テスト前は毎日。

先輩も自分の勉強が有るのにと断つたら復習になるからと言って教えてくれます。

教え方はハッキリ言って上手いです。
懇切丁寧に一から教えてもらってます。

「いーなあー、あっちゃんだけ」

友達から羨ましがられてます。

やはり、うちの先輩方はオモテになれるようです。

あの山脇先輩はクールでかっこいいと…

かっこいいのは解るんですが…

クール？何それ？おいしいの？って感じですが…

何だかんだで6月です。

「淳華！！これやる」

最近、何故か餌付けされてます。

ことある事にアメだのお菓子だの…

なんなのでしょうか？

まあ、貰えるものは頂きますがね。

「あっちんおはよー」

「あ、錦先輩おはよーございます」

最近、授業の前に朝練をするため7時には登校している。

朝練は自由で来なくてもいいのだが満員電車が嫌なので私とイモは朝練に参加していた。

駅から歩いていると後ろから1年先輩の錦先輩が声をかけてきた。

「錦先輩珍しく早いですね」

そう錦先輩に言ったのはイモだった。

イモは密かにこの先輩に気があるらしい。

と、たまが言っていた。

「うん？それが晴明に渡さないと行けない物があつてさ」

山脇先輩は特進で普通科等と違い、一時間早く授業が始まるため登校が私たち朝練組と被るのだ。

「へ〜」

などと話ながら校門に差し掛かると目の前に山脇先輩がクラスメイ
トだろ〜う友人達と歩いていた。

「晴明〜!!」

錦先輩が声を上げると山脇先輩達が後ろを振り返った。

「淳華!!!」

いきなり名前を呼ばれビックリする。

なぜ私？錦先輩ではなく？

驚きながら頭を下げて挨拶をする。

「おいおい…俺らは無視かい…」

「しょうがないですよ…山脇先輩はあつちんが可愛いんですから…」

錦先輩とイモがため息混じりに話しているが内容の意味わからない。

「おはよーございます」

「はい。おはよーさん。今日も朝練？」

「はい」

「山脇、その子部活の後輩？」

「ああ、」

「へえ〜」

先輩の友人の一人が意味深に私を見て笑う。

首を傾げ、山脇先輩とそのご友人を見上げる。

山脇先輩は友人を睨みながら私の頭に手を伸ばし、ポンポンと触る。

「ほら、頼まれてた奴」

呆れたように錦先輩が紙袋を渡す。

「悪いな」

「何々？エロ本？」

中身が見えない袋に山脇先輩の友人がからかう。

「なっ?!!」

「あらら〜」

イモは面白そうに笑い、私は顔を赤くして絶句してしまった。

そりゃあ、17歳ですからさうゆうのに興味があるのは当たり前。

しかし、山脇先輩と繋がらない…

「違うっつーの」

隣の友人を叩き、手渡された袋をそのまま私に差し出した。

「え?! こうゆうのはあまり興味が無いので結構です!!」

顔を真っ赤にして手を振る。

「エロ本じゃ無いって言ってるだろうが!」

「違うの?」

「見たいなら今度貸そうか?」

「遠慮します!!」

恥ずかしさを隠すように袋を引つたくる私にクスクス笑いながら頭を撫でられた。

「おい、そろそろヤバイぞ」

「マジか、じゃ、またな」

友人に言われ、腕時計を見ると慌てたように特進塔に向かって走り出した。

と思ったら振り返った。

「淳華!! これやる!!」

ポケットに手を入れて何かを掴むと此方に投げた。

慌ててキャッチするとニカツと笑いまた走り出した。

「何々?」

手を開くとあめ玉が三つ入った小袋だった。

「やつぱり餌付け?」

首を傾げながらポケットに直す。

「やつぱりあつちんは特別なんだね」

「みたいだな」

面白そうに笑うイモと錦先輩に首を傾げ音楽室に向かうのだったんだ。

余談

「錦く持ってきたか？」

「おう！！兄ちゃんの秘蔵DVDだ！」

「マジか！！って、おい。これ数学の参考書だぞ」

「あっ…渡す方間違えた」

一方、淳華達1年組は…

「んで、山脇先輩からのなんなの？」

「多分数学の参考書じゃないかな？」

「なんでそれを錦先輩が持ってたんの？」

「さあ？」

「これ参考書？なんの参考にするの？確かに本では無いけど」

「なっ?!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7397y/>

部活時々初恋

2011年11月24日01時49分発行